

北米インディアンの生活 (6)

— 23部族の伝承と習慣 —

エルシー・クルーズ・パーソンズ編著

神 徳 昭 甫 訳

VI メキシコの部族

VI - 2 テスカトリポカ¹⁾の代役

この物語^{原注1)}は、貧弱な言葉と実体のない文句から出来上がった屋気楼である。それは遠い、古の、遥かな霞のようにおぼろげな事物の膜の上に塗り重ねた絵画であり、現代という地層の下に埋もれて、実際には決して甦ることのない幾多の都市や、その壮麗な美をわずかながらも反映し、浮かび上がらせている。それは、漠然とではあるが理解可能な形で、ある素晴らしい人間社会が、その共通の思考や必然性と思しきものから造り出した奇妙な信仰、哲学を描き出している。

諸君は「過去」、つまり見慣れぬ衣装や装具を纏った物質的な「過去」というよりも、むしろ観念や、野望、そして狂騒からなる無形の過去をこれまで理解しようとしたことはあっただろうか？ 諸君は精神を自らの肉体から切り離して殊更過去の歴史上の一時代という、^{エモーショナル}情動的な母胎の中に閉じこめた経験はあるだろうか？ 浮かぬ顔つきをした先祖たちの、その年老いた顔が、おぼろな背景の中から想像もできないほど新しい諸君のその生活ぶりを凝視している大広間^{ホール}にあって、諸君は足を停めてそこに表出されている薄暗い絵画を覗き込むとか、あるいはまた、巡礼行脚とか十字軍の遠征などが、今日いかに不可能であるかを考えたりしたことはないだろうか？ さほど遠くない過去のことだが、優雅に組み立てられた石の中でのゴシック的空想が、戦乱を憂う世界中の眼の前でもろくも崩れ去ったとき、はじめてこの恐ろしい考えが諸君の上に迫ってきた。「キリスト教徒の誰も、あの粉々に砕けた予言者たちの像を再び彫り刻んだり、あの靈妙なアーチを建築作業に携わった初期民衆の恐るべき誠意の中に再び架橋することができないのであろうか？」

さて、形を変えるもの、それは石ではなく、鑿でもなく、いわんや個々の男女の愛憎でもない。移り変わるもの、それは社会の大霊^{オーヴァー・ソウル}²⁾なのである。なぜなら、我々の手を導き我々の心の中に義務とか、誠実の推進、さらには我々が絶対的と考えているが、より大きな視点から見ると相対的なものに過ぎない、宿命のと認識されるもの等々、これらの種子を植え付ける大霊の由って来たところは部族であれ、国家であれ、われわれの群居生活の中からであるからだ。これらの大霊を作り上げる共同社会の情動^{エモーション}という雲のような実体は、西空にあるときのように炎と燃え、やがて色褪せて、二度と同じ形、同じ色を取ることはない。

鉄の鎧に身を固めたコルテス³⁾の部下たちがヴェルクルス⁴⁾に上陸する前、メキシコでは、「神々の黄昏」⁵⁾にも遡る一つの文明が栄えていた。何世紀にもわたって蓄積してきた芸術や祭式によって、砂漠のテントから抜け出て、トウモロコシの茎やカボチャの蔓の中の泥や石の家に住むようになった蛮族の、初期の未熟な思考は豊かで洗練されたものへと変わっていたのだ。幾多の都市、実際数々の国家が興り、栄えそして滅びたのであった。神官と呼ばれる、祭儀の化身に対して奴隷が、また国王と呼ばれる、政治的権力の権化に対しても奴隷が奉仕するに至った。そしてこれら一切のものの背後には神々がいて、人々は彼らから与えられる恩恵に対するその正当な見返りとして生け贄を捧げたのである。その上人民はかの大霊に命じられ、神々のためにあの壮大なピラミッドの頂上に輝く祭殿を建立し、神官や国王のためには、光溢れる庭園付きの王宮を立てた。さらにもう一つ、大衆は、交易や戦役において功あったものに対して名誉や褒賞を与え、特定の人々やその子孫たちの上に上流階級というブランドを押しした。これは彼ら人民の忠誠心を物語る神話である。……

老いたる賢者は、何度も神殿の階段を昇り降りしたために腰が曲がってしまっていたが、しかし星を眺めることから生まれた、そのしっかりした信心深い眼差しをもって遠い未来の出来事を、人を欺く明瞭さで予言したのだった。この老人はクアウナウアク⁶⁾における易者、すなわち人々の運勢を判じ、また暦の記録をも司っていたから、絵本（暦書）を何冊も真剣に読んだ後、今度生まれてくる子供の中に、大小様々な神々の纏れた利害を読みとったのである。「その子が生まれたら以後、マキユクアウティ、五の鷲⁷⁾と呼ぶように。さらに族長が知るべきことはすべて教え込むのじゃ。子供は品格、技量、あらゆる学問を身につけるであろう。やがて高位の支配者に就くことになるからだ。ここにそう、書かれておるのじゃ、この都市^{シティ}を治めることになるう、とな」

五の鷲の父は、クアウナウアクの軍隊にあって隊長、旗手、さらに政治に関しては、参議を兼ねていた。言語の異なるトルッカ⁸⁾の民との戦乱でのめざましい戦功を物語る勲章を誇らしげに持っていた。しかしクアウナウアクは戦士の町ではなかった。この人口稠密なトラウイカ人⁹⁾の首都（読者は今に残る、あの太陽と怠惰のクエルナヴカ¹⁰⁾からご存知かもしれない）は、水は跳ね、花は燃える谷間の、アフスコ¹¹⁾の霞に包まれた家並から遥か下方にあった。

なるほど、ここの人々は、アステカ人¹²⁾ や他の部族らとともに、七つの洞窟¹³⁾ から出た部族であった。しかし寒冷な高地を下り移動してショチヴェツァリ、すなわち花の女神であり、世界に美を付与し、その代わりに力を受け取る、あらゆる芸術の庇護者、の慈悲深い保護の下で繁栄を極めていた。

五の鷲は五歳のとき、煌めくプールの中に噴水が ふつつつと湧き出ている父親の中庭の、影深い柱廊^{ポーチコ}を離れ、他の若者とともに学び、寝起きするため、御堂の一つに移った。彼はほっそりとして、明るく、思慮深い顔つきの少年だった。老年の戦士たちの指導の下では、簡単な槍投げの技を習得したのみに留まり、木剣や籐の盾を使って戦う武道試合の折りは自分の番で勝ってもほとんど誇りにも思わなかった。それよりむしろ、両縁付きの太鼓を叩いて、勇壮な部族の戦歌を打ち鳴らすのを好んだのだった。彼は誰よりもこの技量に上達し、そのゴム先をかぶせた二本の撥^{ドラム・スティック}が彼の二本の腕に握られれば、たちまち、激しく、神経を高ぶらせるリズムを掻き立てたので、老人も若者も狂ったように輪になって回り始め、古い遊牧時代の歌を唱い出すまつであった。さもなくば、彼は木立の中に隠れて、土製のフルートを吹き、もの寂しい歌を奏でたものであった。

彼は重なる丘を越えて鹿や野生の七面鳥の棲息地へと続くあの、狩猟者の通る狭い径を知っていた。彼はまた、クアウナウァクと五つの湖のある谷を隔てる高い山の山腹の、曲がりくねって人を寄せ付けない尾根には、巨大な溶岩が流れ落ちたことを知っていた。この黒く荒涼たる溶岩の先端部に登り、蝙蝠が飛び回る洞窟に下りたこともあった。

市の立つ広場の、神殿が落とす影の中で何度か五の鷲は、自分の未来に素晴らしい予言をしてくれた、あの暦を読む老いたる僧侶に出会った。この賢者は知識には限りがないことを知っていた。蹲った姿勢で前に何冊かの本を広げながら老人はまた別の本を書いていた。しかし若者が近寄ると常に筆と、コピー紙サイズの紙の何枚かを脇に寄せた。まず自分が何の計算をしているかを説明し、それからこのテーマの大きさに話が敷衍し、この若い弟子に対して、日、月、年という車輪に乗っていかに時は進んでいくか、また明けの明星、金星の周期がいかに、禍福を予兆するか、さらに神々はいかに交代で時を支配するかを、語ったのである。彼はこの少年に大きな数の計算とか、象形文字の書き方、歴史の読み解き方、さらにあらゆる神々の顔や、そのはっきりした特徴を正確に筆で描く技術を教えたのであった。

時には真夜中に若者を高いピラミッドの頂上に、またその神殿の扉の真ん前までも連れていったりした。眼には見えぬとも静かな風のそよぎが聞こえ、甘い花の香りが漂ってくるさ中、眼下で市街地が眠っていた。糸のように微かに川が光っているのを除けば峡谷は深い陰の中に包まれている。庶民の棕櫚葺きの家々が谷間の中にすっぽりとくるまれている一方、あそこで中庭の周りに建てられた首長たちの屋敷が点在している。さらに大きな広場の四辺には兵舎や公共の建物が並び、夜の闇の中でその漆喰の壁がうす気味悪いほど白く光っている。市場で

はまだ消えかけた焚き火の熾火がまだ赤く燃え、その周りを遠くから荷を運んできた男たちの防寒着にくるまれた姿が取り囲んでいる。数多の神秘が人の心に忍び寄る、厳かな時刻であり、かてて加えて彼らは一段と厳粛な場所にいるのだ。頭を寄せ合い、二人はときどきは声を潜め、また恭しい口調で話しながら、北極を中心にして壮大な回転運動を行う無数の星辰が、悠久の深さを持つ天空をよぎって堂々で行進しているさまを眺めたのである。彼らはこうして偉大な白い明けの明星が、イシュタクシウアトル山、白い婦人の穏やかな雪の上に見事な宝玉のように架かるまで、徹夜の行を続けたのだった。やがて東の青が真珠色、さらに薔薇色へと変わり、家々の重い棕櫚葺きの屋根の間から新たな煙が昇ってきた。街は動き始め、市場は売り手と買い手に溢れ、黄色い太陽がまた一日を開始したのだった。

あるとき、五の鷲と老賢者たちは連れだってショチカルコ¹⁴⁾ 遺跡まで出かけたことがあった。廃墟の中で、ただひとつだけ残った神殿でまだ祭祀を行っているのである。百以上の建物の壁が崩れ無惨な瓦礫の山となっていた。前方と両側は、台地状の丘が大きく崩れ落ちていたが、しかしその背後に別の丘陵が堂々たる高さに聳え、頂上に見晴らしのための足場が設けてある。老神官はこの殆ど忘れられたかつての首都の歴史の破片、すなわち、幾多の王の名や、数々の勝利を告げる、今は空しい日付を含む伝説のかけらを物語った。そうして彼は悲しそうに呟いた。「偉大な栄光もポポカペトル¹⁵⁾ の煙のように過ぎ去ってしまい、空は今日も穏やかだ」

「でも、テノチティラン¹⁶⁾ は」と急に若者が口を挟んだ。「あの有名な都市について話して下さい。きっとあなたは行ったことがあるでしょう。そしてその栄華を眼にしたに違いありません。いちど僕は、アフスコの頂上から眺めたら、遙か下の溶岩の向こうには、谷間の五つの靄のような五つの湖が見えました。そこにテノチティランが宝石のように輝いていたんです。またそちらに向かって無数の道路がまるで蜘蛛の巣のように張り巡らされていました」

「テノチティランとな。そうだ、わしは見たことがある。その庭園や神殿は、豪奢でまた美しい。そこの僧侶や戦士隊長は翡翠やケツァール鳥¹⁷⁾ の緑の羽根をつけておる。でもテノチティランはアナワク高原の全都市の中では一番新しいからな。チャルコ¹⁸⁾ やコルワカン¹⁹⁾、アスカポツツアルコ²⁰⁾、それと、人望のある祭祀長が支配したテスココ²¹⁾ だっけと古い歴史をもっている。奴隷の身分で困窮状態にあったアステカがやってきたとき、ティノチティランの大きな湖の周囲には岩と葦しかなかったそうだ。しかしこの部族は、タクパ²²⁾ から漁業権と水上都市を建てる許可をもらったんだ。それからアカマピチトリ²³⁾ と息子たちが攻めてきたとき、彼ら漁師は応戦して、彼らの神ウィツィロポチトリ²⁴⁾ が勝たしてくれた。今やこの谷間にはテスココを除いて古代の都市はすべて滅んでしまった。テノチティランのアステカ族は貢ぎ物と捕虜を求めてコリマ²⁵⁾ とタシュパン²⁶⁾ に行き、 Cholula²⁷⁾ を通過してサポテカの國に移った。彼らの商人がまずめずらしい品物をもって偵察に出かける。そのあ

と、戦士たちが稲妻のような早さで攻めてくる。彼らを追い返したのは、野蛮なタラスカ²⁸⁾だけだった。トラスカラ族²⁹⁾は石の壁を築き、防戦した」

そんなふうに暦学の僧は、メキシコの長い歴史を語り、年の終わりまで二十日に一度、行われる大きな祭りを述べた。彼は、生け贄となる人間の血に飢え、またその心臓を欲しが
る。それらは自由に与えられたのだが、いろんな神々の特徴や力を話したのである。

「しかし」と五の鷲が口を挟む。「昔はショチケツァリ³⁰⁾に花だけ捧げたそうですね。今は子供を生け贄にしなければ、この神様はご機嫌を損ねてしまう」

「子供こそが一番綺麗な花なんだ！ それにご利益のある神には高価な贈り物をしなくちゃならんからね。しかしわしは、人身供犠にはときどきその土地の誇りというものが入り込んでいると思うし、また、余りに高い祭壇には人間の奢りというのが感じられるんだ。われらの創造主が、この方にとっては神々さえ絶えず争いを繰り返している子供のような存在なんだが、人間にも理解できるように最後の真理を語ってくださればなあ！。しかしトラロック³¹⁾が、雨をタププリ降らしてくれる前に、血の滴りを望んだとしても、それは当然受け取るべきものなんだ。雨が降らなければ、この世は終わりだ。だが、ウイツィロチトリはこの神の旗の下でテノチティトランの人々は戦うわけだが、単なる戦争の神だよ。この神が約束してくれるのは略奪だけさ。もとは小さな神だったが、急に大きく堂々たる存在になって、その子供たちにもメキシコの全都市が貢ぎ物を供えるまでになった。しかしテスカトリポカが、すべての場所で一番エライ神だ。この神の前では何物も隠すことができない。どうか穏やかな気分ときだけ、ワシらのことを思い出してくれればいいんだが！」

今なおクエルナヴァカには、彩色を施したテノチティトランの戦士たちが、クアウナウァクを急襲したときの運命のときにまつわる、盾や弓矢の束、さらには象形文字による記録を彫り刻んだ大岩が残っている。このとき花の都は、雨のように降り注ぐ火矢、炎の風の前に涸れてしまったのだった。奴隷や、もっと名誉ある犠牲として連れ去られた男女の中に、五の鷲が含まれていた。この若者は、その非常時において真のリーダーとしての特質を発揮したのだ。混乱の最中で、彼は民族の長として立ち上がり、自軍を率いて勇敢にも敵に対抗した。しかし遂に彼は捕らわれ、テノチティトランに連行されたが、それでも族長としての地位は維持し、翡翠の耳当て、サンダル、さらに高位の身分を示す刺繍入りのマントなどは身に付けたままだった。

このとき、誕生時の予言は成就した。なぜなら、その美しさ、大胆さ、歌や音楽の才によって五の鷲は、富と名誉、さらには国王の権力を手に入れたからである。彼はテスカトリポカの代役、つまり、人間として生まれ、人生を享受する、もう一人のテスカトリポカにされ、その一年がゆっくりと過ぎてトシュカトルの祭り³²⁾を迎えるまでのあいだ、あらゆる望みを叶えられることになったからである。彼の笑い声は全地にとって幸運を意味し、はたまたその束の

間の悲しみによって全地は、悲哀の金縛りになった。しかしありとあらゆる名誉に包まれ、あらゆる典雅・趣向を極め、飽食したあらゆる快樂を味わい尽くしたまま、彼はついに黒い玻璃のナイフの刃の下に進んで身を横たえねばならぬ。だが、うら若いその生命は、テスカトリポカが永遠の若さを得るように、またその力が、忍び寄る時という名の身体の衰弱によって洩れることのないように、最後にまた、その神秘が人間という悲しい種族に活力と至福を表すように、彼の命は捧げられなければならない。

あの信仰の黎明期に諸々の希望や恐怖から人間の想像力が造り出した神々は何と素晴らしい存在であろうか！ 彼らは星や嵐、青い海から、また不可思議で強力な動物から創り出された、美しくもまた恐ろしいいきものであった。あるいはまた、彼らは創造者である、当の人間自身の姿や精神よりも、はるかに大きく聳え立っている。彼らは、人身供犠という名での誠意、祈りや芳香、献身的行為によって、また儀礼やその儀式における、ありとあらゆる絵画的で壮麗、かつ一点に力が集中した手順・過程によって、かつまた普遍性という観念のとりこになった芸術家が産み出し造り上げた神殿、歌、像によって、不滅の生命を賦与されて永久に莊嚴な姿で屹立しているのである。彼らは、遥かな高みから目に見える姿、形を与えられた、諸国家の大霊なのだ。しかし創造者にとって彼らは、目の眩むような光を発する偉大な存在である。

それにしても、メキシコのテスカトリポカほど優美な神がかつて天界をまたいだことがあったであろうか？ 彼は、謎めいて、情け容赦ないがまた、偉大なる巫術の神である。彼は、白髪で皺が寄った老人の知恵と、永遠の若者が持つ無謀な喜びを兼ね備えている。素早く、狡猾で征服しがたい存在であり、運命をもたらすと同時にそれを破壊する、また兄弟の神々を呪術によって罠に陥れたりもする。世界の姿を映し出す煙った鏡であるばかりか、人間の心までも見通す太陽であり、彷徨くジャガーであるし、こっそりと陸地や海を越えて忍び寄る夜の風でもあるのだ。だが、その真の姿は、ありとあらゆる策略と魔術を身につけた若者なのであり、優雅で屈託なく、音楽のように蠱惑的で花の香のようにそこはかとないが、しかしまた、稲妻のように残酷で、迅速で恐ろしい。

メキシコの暦で最大の祭りはテスカトリポカを祝って行われたトシュカトル祭であった。それは乾いた田畑が雨を渴望する春期に当たっていた。スラリと伸びた脚の持ち主であり、かつまた聖戦を経験した教養ある、幾人かの囚人の中から選ばれた一人の若い戦士が、架空の栄光の最後の日に生け贄となるや、たちまち別の若者がその空位を満たしたのである。そして既に述べたように、このアステカの首都に到着したときから、この劇的な死を遂げるに相応しい、その候補者として選ばれることが五の鷲の運命であったのだ。当時のメキシコの情念世界において、この祭りの持つ象徴と意味合いを熟知していたので彼は誇りをもってこの役を引き受けたし、あらゆる細部や効果に細心の注意を払ってこのドラマを最後まで演じきる覚悟を決めていた。付き添いの少年たち、つまり、テノチティランの族長や大商人の息子たちが、毎日市

中を練り歩く彼にお供した。これらの少年の数は六人であった。いずれもみな立派なお仕着せの衣装で身を包み、彼らがテスカトリポカと呼ぶ御主人が悲しい思いに落ち込むことのないように気を配るのが彼らの任務であった。清らかな少女らの集団は、五の鷲のために新しい衣装を刺繍し、その首の周りに掛けるため、馥郁と薫る新鮮な花綵を毎日編んだ。後にこの処女の家から四人の乙女が選ばれ、トシュカトルの月、すなわち、陽気と涙で最後を締めくくられる、彼の現世における最後の一月のあいだに、花嫁の役を演ずる定めとなっていた。

そういうわけで、トシュカトルの若者として五の鷲はテノチティトランの公共広場や運河に渡した多くの橋、さらに湖からの突風を防ぐ大きな城壁の上を歩き通したのである。

明るい聖なる衣装に身をくるみ、笑いさざめく供のものと一緒に、彼は横笛を吹き、歌を唱い、かつ舞った。全市の誰も、過去にこれほど風雅に富み、空虚と誇りからなる束の間の舞台を歩むことにおいて、これほど巧みな、大巫王の代役を見た記憶がなかった。華やかなりし時代には、ショチケツアリを崇拜した、クアウナウアクという奴隷の街から来た囚人の五の鷲がテノチティトランの貴賤貧富を支配したのである。

彼は民衆の好む多くの歌を唱ったが、戦いに斃れた兵士を悼む、あの素晴らしい歌、すなわち聖なる軍務の最中に殉職した若者への鎮魂の歌ほど大きな人気を博したものはなかった。メキシコ人なら誰でも、死後何年もたって、その名が微笑と慈悲を意味するようになったトルテカ帝国の全市を支配したある有名な支配者が作った、この歌を知っていたのだ。

深き悲しみに しお垂る花のごとき言葉を 我は求めぬ
 我はわが涙から 悲しみの歌を紡ぐ歌い手
 若者たちの命は、^{あゝ} 噫、槍のように折れ 砕け散りぬ。
 母たちは ^{くる} お勤き片隅で泣く
 されど おのこどち 誇りに満ちて昂らかに頭を擡げぬ³³⁾

それは高邁な勇気と、死をも克服せんとする意力に満ちた雄壮な歌であった。国を挙げての勇敢な行為は、人間心理の奥深くに根ざした、このような歌によって鼓舞されるのである。

かくして五の鷲は、かたわらにお付きの少年を引き連れてテスカトリポカの白いマントを羽織り、首には芳しい花輪を掛けてテノチティトランの市中を練り歩いたのであった。彼が唱う歌は魔法のように、市場や中庭にいる人々を沈黙させ、涙を誘ったが、歌が終わると急に笑い声が起こって、陽気な群衆から彼に向かって花が投げつけられた。それから、あちこちの家からは招かれて極上の果物を食べたり、今ではポインセチアと呼ばれている真紅の花冠を付けた珍しい木の天蓋の下で休むように誘われたのである。何人も免れることのできない聖なる規律によってテスカトリポカ寺院に仕える乙女の中には、五の鷲をおそらく一人の人間以上

に　　　　　といって神ほどではないが　　　　　みなすようになった少女がいた。一度彼女が手織の花綬を彼の肩に投げかけたとき、少年はくぐもりのない目でかすかな、しかし確かに微笑を浮かべて少女を見た。彼女は目を背けたが、生命への関心が芽生え、同時に突如死の幻影をも呼び覚まされて戦慄し、寒気がした。

それから数日して、彼女はまた花綬を編み、ある場所で彼が来るのを待っていた。そのとき少女は、トシュカトルの若者に笑みを浮かべて挨拶したが、思わず涙して顔を背けてしまった。

優しい神官はこれを見てすべてを理解した。女性というものは、死が静止した肉体にもたらず、あのまったく突然の栄光のために涙を流し、嘆き悲しむものだ、ということを知っていた。アステカの詩人や哲学者の思想において、女は地の近くで開く花であった。彼女たちは、男どもを戦陣へと導くウイツィロポチトリの足下で踏みしだかれたのである。彼女らは、究極の犠牲として信を置かれることはなかったから、不意に捕らわれ、また歓楽の最中に陥れられなければならないかった。

夜が帳を下ろし、霧が湖一面にその霞んだ手を延ばしたとき、トラテロルコ³⁴⁾を背にする水門の側で、この神官はテノチティトランの少女に語った。「なあ、あんたは人の思いのすべてをお見通しの神様に、陽気に差し上げなければならない贈り物が欲しいのかい？　恐れ多くもトシュカトルの聖なる生け贄を愛そうというのかね？」

「それではどうしてあの上天の方々は、春になれば私たち人間の心の中で育ち、花開くようにと愛の種子を播かれるのですか？」

「わしら人間だって、ときには心だけが支配する空の高みに昇ることができるためだよ、君。トシュカトルの若者は、クアウナウアクの捕虜だ。彼は勇敢に戦った。彼は、その市とメキシコの全土が繁栄するように勇敢に死ななければならない。万一、失敗すれば、輝かしい死に値しない恥ずべき奴隷として一生を終えなければならない。彼は終身を　　　鞭で打たれて　　　恥ずべき奴隷として生きることになる。テノチティトランの娘たちは、奴隷と結ばれてはならないんだよ」

彼女は、僧侶が話す間、髪に黄色い花を挿み、反抗的な悲劇の人物のように頑固に門の側に立っていた。水門の上の塔には、帰りの遅れた漁船が市に入れるように燈が点されていた。星が幾つか微かに瞬き始めていた。

「しかし、あのやさ男にはまだ二十日残っている」と神官は小声で言った。「明日はあの偉大な慈悲の神、ウイ・トツォストリ³⁵⁾の祭りが始まるし、それから歓喜と悲嘆の神、トシュカトルの月が始まる。二十日というのは、新しい愛の収穫がありまた、それを楽しむに十分であることを意味している。テスカトリポカの愛が与えられる、九天の、あの四人の優雅な天女の名前と衣装をもらってその代役を演じる花嫁が四人いる。おまえは、自分がその花嫁候補の筆頭になれば、それで満足し、また幸せ一杯の気持ちになれるのかね？　彼の意志を強固にす

るために自分の気持ちを強くもって、決して優しい涙を流して彼を死よりも酷い境遇に突き落としたり、また、お前自身が絶望したり、国全体を悲惨な目に合わせることのないよう、誓えるかね？」

新たな光が少女の瞳の中で瞬いた。「わたしが最後まで笑っていられるかどうか」彼女は答えた。「愛の真昼の中で、また高貴な、あの方の愛にくるまれたまま、いつまでも幸せでいれるかどうか、見ていて下さい」 こうしてテスカトリボカの代役たる五の鷲のもとに、身代わりとして与えられた贈り物の中には、彼のみに対する愛という、つつましい贈り物が一つあった。しかしこれは、栄光と悲劇が交錯する、途轍もない物語であって、人間の心の中で常に発見できる、あの、愛と憎悪の卑小な話ではない。

ウイ・トツオストリの祭りのあと再び太陽が昇ったとき、五の鷲は多くの部屋と広い中庭の付いた王宮の座に就いていた。そうして朝日とともに始まった踊りが、青白い星とともに終わった。五の鷲の髪は軍隊の総指揮者のように飾り付けられ、新しい宝石がその身に飾られた。市中の通りに出れば、民衆は彼が通り過ぎるとき膝をつき、頭を下げて祈った。しかし神殿の中では、引かれた幕の陰で多くのことが準備されていたのだ。

トシュカトルの祭りの十日前、巫王の制服を纏った神官が一人、市場の中に踏み込んで、大勢の売り手、買い手が畏れて無言で立ち尽くしている間、土製の横笛を吹いて祈願をした。まるで宇宙全体に呼びかけるかのように、その甲高い音色はまず、東に、次いで北、西、南へ向けられた。その合図の音色が熄むと、みんなが前屈みになり、ほんの少し土を指先でつまんで謙譲と自制のしるしとしてそれを口に含んだ。それから彼らは激しく泣いて地面に身を投げだし夜の闇、目に見えぬ風、さらには偉大なテスカトリボカが人間に語りかけるとき、その仲立ちになる未知の霊に祈願し、地上の人間を忘れないように、また激しい労働で苦しまないように、悲しみや絶望の状態にしておかないように懇願したのである。また巫王は秘密の行為や、人の思いを覗くことができるので、盗人や人殺し、その他、人には知られたくない行為や罪を犯した連中は、非常な恐怖と悲嘆にくれて彼らの顔に現れた怯えによって、犯罪行為が露見してしまったのだ。焚かれた香料が祈りの声を乗せて高く昇って行く間、彼らは触ることもできず目にも見えない存在に向かって恩赦を乞うたのである。戦闘に長けた強者も苦痛のあまり頭を下げて、他の部族を侵略した暁には、多くの捕虜を持ち帰れるよう、あらゆる敵に対抗できる力を乞い願った。こうしてフルートの甲高い音はこの大都市中で恐怖の水門を開くことになり、人々は慄え、涙を流した。穏やかな大気の中で糸のような煙が幾筋か立ち昇っていた。かなたにコーパルの白い煙が見えるかと思えば、こなたにまた、悪臭を放つゴムの黒い煙が見られた。

トシュカトルの祭りの五日前、その当時ティツォックという名の、メキシコの国王=神官は、臣下のものが五の鷲を主人として認め、平身低頭している間、王宮内部の部屋に閉じこもった。

この都市のどの地域にも、あと一日の服従が許されており、仮りそめながら、壮大にして絢爛たる帝国の権力がテスカトリポカに扮した演者に与えられた。こうした日々の中に濃縮された、絢爛たる外観に惑わされ、すべてが見えすぎる、あの「愛」の目さえも、そこに「悲哀」の姿を認めることができなかつたのである。

夜が明けて最後の一日が始まる前、神官たちは神殿に入り、テスカトリポカの石像の古い衣装を剥ぎ取って、新しいものと取り替え、さらに鳥の羽根で編んだ衣装で飾り立て、その上に明るい色の天蓋を広げた。それから神殿を被う幕を引いて、その堅固で素晴らしい像を世間の前に明らかにしたのである。これをすませた後、高位の神官が一人、手に花を持って現れ、再び東、北、西、南の順に神々への請願を唱えた。

蛇の形が刻まれた壁に囲まれた神殿の前に位置する、この都市一の広場に群衆が集まると、五の鷲とテスカトリポカの像、香料を収めた柄杓を運ぶ二人の神官の背後に行列が進んだ。五の鷲は奴隷の肩に載せて高くと運ばれる豪華な鳳輦ほうりんに座っていた。その後ろに、身体を黒く塗り、項のあたりで髪の毛を白いリボンで括った、巫術をこととする高位の神官たちが乗る籠が続いた。そのとき突然、特にテスカトリポカの神殿で一年間仕えた、男女からなる若者たちの集団が、それぞれその手に驚くほど白い綱を持って飛び出し、豪華な籠の列をその綱で取り囲んだのである。この綱は、ポプコーンを数珠つなぎにして作ったもので、田畑の飢渴を象徴したものとされている。少年たちは、ゆったりした網状のマント、少女たちは、首回りと縁を華やかに刺繍した上スモック張りスモックを着ていたが、全員がポプコーンの首飾りと、ターバンを身に着けていた。すると、神官たちは前に身を乗り出して、その長くて白いポプコーンの綱を掴んでは、自分たちの頭に回し、さらに籠の周囲にも巡らせようとした。それから行列は、花と一緒に撒き散らされた緑の葉の道をゆっくりと前進していったのであった。その地面にはまた、多くの改悛者の舌や耳に突き刺さしてそこから滴る血溜まりが、陽を受けて燦爛と輝くに至る、竜舌蘭の針のような先がばら撒かれていた。さらにまたその行列の中には、瘤のついた紐で自分の身体を鞭打つ人たちもいた。しかしこれは、人間の群衆心理が掻き立てられたときにはいつでも見られる、狂乱状態の一種に他ならないのである。

この驚くべき一日に起こった出来事の詳細を縷々と述べるとすれば、あまりにも退屈なものとなるであろう。テスカトリポカのピラミッドの頂上には威儀を正した面々が列席し、神殿の扉の前にもまた、いかめしい石の像が立っていたが、一方、下の広場では、複雑な踊りが行われているところであった。五の鷲は、誕生時に予言された栄光の瞬間を正確かつ着実な芸術的才能をもって演じ、また威厳の保持と義務の遂行という点において、微塵も妥協しなかつた。

太陽が山の端に向かって落ちていき、長く輝かしい一日が終わろうとするころ、水上の野外劇ベージェントが始まった。花や満艦飾の旗で飾りたて、日除けと日覆いを上にかざした、大きなカヌーが、一列に長く続いてやってきた。これらの一番先の舟に花嫁を傍らにした五の鷲が端然と玉

座に着いていた。うっすらとした雲の影を映す、蒼い湖面は静かで、舟の後ろに残る大きな航跡が、漣となって遠い対岸の葦や柳の木に伝わっていった。

いまもなお、笑い声が聞こえていたし、陽気で浮かれた振る舞いも残っていたが、この空想の劇で山々の頂上の女神を演じている乙女のその瞳には、霞のようなものが漂い、その唇には震えるような笑いが浮かんでいた。彼女の黒い髪を恋人の手がやさしくなぞる。彼の心はもはや死んではいるが、精神は物質に勝るといふ微妙な劇において神を演じているのだ。

「おゝ、霞の家の貴婦人よ、ご覧、そなたの白い霧がアフスコに漂い、ショチケツァリが愛する、その世界一の花にいま露を落としているよ」

「ご主人さま、あれは、悲しくてまた楽しい霧でございます。今日、世界を暗くする霧かと思えば、明日はもっと綺麗なものにすることも知れません」

「それでは、日が暮れて釣り船が運河に入ってくる明日になっても、そなたの心を、何の影もよぎることがないと、私に言ってくれないか。これまで通り、ただ満足があるのみで、決して影がよぎることがないと、おゝ、私の大切な霞の婦人よ！」

「トシュカトルの若者よ、決して泣いたり致しません！」

トラピツァウアヤンと呼ばれる岩の岬にカヌーの一行は着いて陸に上がった。ここでトシュカトルの廷臣たちと、四人の花嫁は陽気に別れを告げ、彼は六人の少年とともにトラクチカルコに向かって出発した。これは毎年、このときを除いて忘れられ、使われずに放置された、近くにある古い神殿なのである。曲がりくねった一本の道が、サポテンとアカシアの多い岩場を通して、砂漠の草木がはびこる神殿の丘へと続いていた。

壊れた階段を昇れば朽ちかけた生け贅の部屋に達するが、その戸口は黄色の蘭と、棘の多い蔓でほとんど塞がれていた。この粗末な衝立の後ろに、大神官の飢えたナイフが一口、血を嚙ろうと待ち構えていた。お付きの少年たちは五の驚のあとに続いた、すると、浜辺の方から突如、どおーっと最後の笑い声が上がった。

神殿の階段の足下で少年たちは、彼の肩から若さを犠牲にして若いままでいなくてはならない神の白いマントを剥ぎ取った。次いで、その腰から派手な錦織の腰布を取り、その足からはサンダルを、そして両耳から、地上の権力を握った彼の最後の一年を象徴する、最後のものである淡黄緑色の翡翠の輪を外した。ただ、その首回りにはフルートのネックレスのみが残っていた。彼は、人間の究極的な謙譲を示す形となって、貪欲かつ宥和し難い一人の神に自らの命を贈与するという、誠意を示すために、こうして裸の人間となったのだ。

優しい笑みを浮かべて五の驚は、供回りの若者どもを退去させ、壊れた階段を登った。一段ごとに足を止め、両手に挟んだ横笛を奏でていた。しかし次の瞬間、胸を大きく開かれた裸の人間が、神殿の階段からドサッと落ちてきて、茨と舗石を真紅の鮮血で染めたのであった。

・ ・ ・ ・ ・

我々は「過去」というものを、ただ「現在」の仮装劇としてしか知ることができない。我々は鼻腔に届き、目の前を通り過ぎる臭いや色彩しか想像できないのである。現代に神はいない、と諸君はいうかもしれない。確かに、あの怖ろしいシヴァ³⁶⁾や、キリストの優しい顔が、不信を覆う霧の中へと色褪せ、後退していったのは事実である。

しかし今日、何と多くの青年イカロス³⁷⁾が嬉々としてその眩めく高みから「死」のダイビングを繰り返していることであろうか。我々は、「運命」の力によって、靈妙な鳥の王国や、海の青い深みを侵犯しなくてはならないのか？あるいは我々は、歌や同胞意識、さらには仕事と遊びという、お仕着せの人生から作り出された、新しい指揮官たる「大霊」の欲望や誠意によってこれらの領域への征服に向かって衝き動かされているのであろうか？なぜなら、かつては従属した諸勢力が、忙しい主人を奴隷にせしめ、また「迅速」と「戦慄」という新たに見つかった神々がその犠牲者を、今はないテノチティトランの血塗られた生け贄の祭壇へと勇敢に上り詰めていった、あのトシュカルの若者同然の、自由な捧げものと見看しているからである。「機械」の精神が、平伏した新国民を支配しようとして出現している。後世の人々は、これを物語の薄霧の中に投射された奇妙な屋敷と見るかも知れない。

ハーバート・スピнден³⁸⁾

原注

- 1) 著者の希望により本作品では編集者による修正は一切行われていない。-- E. C. P.

訳注 (*印は当該の項目が後出することを示す)

- 1) テスカトリポカ Tezcatlipoca。中央メキシコ高原におけるアステカ人の信奉する神々の中でも最も重要なものの一人。その名前は、「煙る鏡の主人」を意味しており、アステカの神官が占いのために使用した黒曜石から作る鏡のことを示している。テスカトリポカは、アステカ神話において、実に多くの相反する役割を演じている。アステカの他の多くの神格がそうであるように、創造神であると同時に、破壊の神でもある。太陽の神として作物を実らす一方で、植物を涸らす灼熱の早魃をもたらしたりするのである。孤児や奴隷の守護神であるのに、王族の庇護者でもあり、戦争の神で人身供犠を喜ぶ残酷な一面を持つ。また罪人や詐欺を罰する役も有するが、彼自身はそれほど信用されていない。太陽に関係はあるものの、夢、呪術、妖術、悪霊を含む、夜とその暗黒の神秘性の方にもっと深い繋がりがある。伝説によれば、肋骨のあいだが、扉のように開いている骸骨の姿で毎夜、地上を彷徨するという。テスカトリポカに出会ってこの扉のあいだを通り抜け、心臓を掴むくらい大胆な人間には、富と力を約束するがしかし、この約束は決して守られたことはない。

トリックスター神として、テスカトリポカは物事の秩序を逆さまにしたり、混乱や闘争を引き起こす

ことが好きである。ときどきこれらの混乱がまた、創造的なエネルギーや積極的な変革への源泉となることもある。この神の究極の悪戯は、双子神の一方の、ケツアルコアトルに対して仕掛けた悪さであろう。ケツアルコアトルを泥酔させたり、他の悪習に誘って、そのあと如何に彼が弱くて墮落したかを見せるために、鏡を差し出したところ、ケツアルコアトルは恥じ入って逃げ出したので、世界はテスカトリボカの支配の下に入った。しかし彼は五十二年周期の後、戻ってくることを予言したのであった (John M. Wickersham ed. *Myths and Legends of the World*, Vol. 4, Macmillan Reference USA/An Imprint of The Gale Group, New York, 2000, PP.57-8.)

- 2) 大霊 over-soul。 R.W. Emerson (1803-82) の提唱した哲学上の「宇宙に生命を与え、また全人類の靈魂の根源をなす神」のことではなく、ここでは単に一つの共同社会を成り立たせる共通の思考、その共同意識、もしくは情緒的紐帯のようなものをさしている。
- 3) コルテス Cortes Hernando ~ (1485-1547)。 スペインのコンキスタドル (征服者)。エストレマドゥーラの貴族の家に生まれ、サラマンカ大学に学ぶ。十八歳で海を渡り、西インド諸島サント・ドミンゴへ来島 (1504)。1511年ベラスケスのキューバ征服に参加、さらにメキシコ征服では指揮官に任命され、各地で兵員を増強し、十一隻の船団に六百六十人の兵員、砲十四門を擁して十九年キューバ西端サン・アントニオ岬を出帆、ユカタン半島に向かった。暴風雨や原住民の反抗にあたりしたが、結局四万の原住民軍を降伏させて講和した。このときに贈られた二十人の女奴隷の一人マリナルと結婚して航海を続け、アステカ族の首都に近い港にベラクルス*を建設、命名し、永久植民地とした (1519)。モクテスマ二世のメキシコ地方は政情騒然としていたが、コルテスの征服軍に頑強に抵抗。一方キューバ総督ベラスケスとの関係が悪化し、ハイチ総督ディエゴ・コロンの仲裁も空しく、ベラスケスはコルテス追討のためナルバエスを派遣 (1520) したが、コルテスは逆にこれを急襲、ナルバエスを配下に加えた。その後、メキシコ側と苦戦のすえ、アステカ文化を破壊、原住民を虐殺してこれを平定 (1521)。ヌエバ・エスパーニャ植民地の経営に意を用い、さらに南方マヤ、西方の未開地を探検、アジアへの道を探索したが、大きな成果をみず、1540年帰国した (飯塚一郎「コルテス」『日本大百科全書』小学館、1995、9巻)
- 4) ベラクルス Vera Cruz or Veracruz (旧名)。 メキシコ東部のベラクルス州の都市。メキシコ湾に臨むメキシコ第一の要港。本注3)も参照。
- 5) 「神々の黄昏」 a twilight of the gods。 ワーグナー (Wagner, Richard, 1813-83) の楽劇四部作『ニーベルゲンの指輪』(1853-74) 中の第三部をさす。同作品は北欧神話や中世ゲルマン民族の伝説をもとに伝説の英雄ジークフリートの冒険、結婚、その死を雄大な構想の下に描いた悲劇。同様に 神話時代 という意味で、ここでは16世紀のコルテスの侵略に先立つ、アステカや、マヤ・トルテカ、さらにテオティワカンにまでも遡る、メキシコ中央高原 およびユカタン半島に花開いた古典期前期から後古典期後期 (300~1519) に至るメソ・アメリカの古代文明全体を示している。
- 6) クアウナウァク Quauhnahuac。 本編「テスカトリボカの代役」の主人公、五の鷲*の故郷。アステカの侵略によって滅ぼされたトラウイカ族*の首都。
- 7) 五の鷲 Five-Eagle。 メソ・アメリカ先住民は、生まれた日の名称をそのまま、名前として付けられる習慣があった。宗教的儀式のために用いられる神聖な太陰暦の一年 (260日) は、20日からなる一月と、13 (天界は13層からなるというこの地方の宗教観に由来する) の数字を掛け合わせた260日からなる。一月20日を構成する、一日は地方によって異なるが、英雄や動植物、鳥の名前が付けられていたが、その前に必ず数字を前置するのがその習慣であった。例えば、メソ・アメリカ全体にも流布するマヤの文

化英雄ククルカン（羽毛の生えた蛇の意、メキシコではケツアルコワトル）の原型的人物と見なされる、トッビルツィン・ケツァコワトルという、ツーラの神官もその名の前に「一の葦」（Ce Acatle = セ・アカトル）という「日の名称」が冠せられていた。

- 8) トルッカ Toluca (Toluca) メキシコ中央高原に位置する都市の一つ。近くにトラシュカラ、クエルナヴカ*、プエブラ、モレロスなどがあるが、スペインの征服者が建設したプエブラを除き、コロンブス以前の時代では、この地方の「中央マーケット」を構成する重要な 役を果たした (Frans J. Schryer, "Native Peoples of Central Mexico since Independence", *The Cambridge History of the Native Peoples of the Americas*, Vols. II, Part 2, ed., R. Adams & M. MacLeod, Cambridge University Press, 2000, P. 228)。
- 9) トラウイカ人 Tlahuica。 メキシコ中央高原西部に位置する一部族。近隣のクルアック、アコリュアック、ショチミルカ族同様ナアトル語を話す (Sarah L. Cline, "Native people of Colonial Central Mexico," *Ibid*, P. 187)。
- 10) クエルナヴカ Cuernavaca。 本注 8) にあるように、メキシコ中央高原および盆地間に位置する都市。ナアトル語を話す民族の一つ。プエブラ、 Cholula* に近い。
- 11) アフスコ Ajusco。 文脈から察するところ、クエルナヴカに程近い谷間の集落であろう。詳細不明。
- 12) アステカ人 Azteca。 「伝説上の発祥の地“アストラン (Aztlán サギの多い地)”に由来する民族名で、メシカ族*ともいわれた。北方から進入した遊動狩猟民チチメカ族の一派で、13世紀末に中央高原のメキシコ高原のメキシコ盆地に到達し、初めは近隣のクルワカンやアスカボツァルコ*に従事し、貢納しながら農耕を覚えるなど、先住民の文化を身につけていく一方、次第に勇猛な戦士として知られるようになった。14世紀半ば（一説には1325年）には、メキシコ盆地内の湖の西岸近くの小島に都を定め、テノチティラン (Tenochtitlan。現代のメキシコ市の中心部のある所) と名付けた。その後、クルワカンのトルテカ族の血をひく貴人を最高首長（トラトアニ）として迎え、1428年には、西岸の都市トラコパンと東岸の都市テッココ（現在のテスココ*）と連合して、それまで従属していたアスカボツァルコを滅ぼし、メキシコ盆地の覇権を得た。3都市による同盟であり、支配下の町々の納める貢物を分け合ったが、軍事的に優勢なアステカ族が事実上指導権を握り、姉妹都市でやはりアステカ族の住むトラテロルコ*（テノチティランの中心部より北北西に約 3 km）には大きな市場が常時開かれ商業の中心地となっていた。1428年頃以前のアステカ社会は部族組織の名残をとどめ、首長（大神官を兼ねる）の他に神官とカルプルリと呼ばれる共同体の長が重要な決定を下したが、アスカボツァルコから独立後は、最高首長を頂点とする貴族（軍人、商人、神官、軍功により昇格した戦士を含む）と平民（マセワルリ＝農民）と農奴（マイエケ）という 3 つの階級に分化した。アステカの代々の首長は、各地に戦争を仕掛けたが、軍隊を常駐させることはなく、徴税吏を置くのみであった。車や大型の家畜はなかったが、都へは大量の貢納品と戦利品を人力で運び、トラテロルコの市場は繁栄を極めた。また東方のマヤ地域から交易を通じて熱帯産の貴重な原料（カカオ、羽毛、木綿、翡翠など）を入手し、それを加工して一部は輸出した。中央高原付近の住民は文化的に一体化が進んだものの、遠隔の土地には絶えず軍隊を派遣し支配を確保せねばならず、広大な領地を有したとはいえ、帝国と呼ばれるには程遠かった。それでも、最盛期（15世紀末）には首都の人口は10万人を越え、領内の人口も1,000万近くに達していたと推定される。アステカの宗教では、部族神ウィツィロポチトリ、トラロク（雨の神）、ケツアルコアトル、テスカトリボカなどが崇拜され、都の大神殿（ピラミッド）では毎日沢山の人間（とくに戦争の捕虜が好まれた）の心臓が生贄として捧げられた。太陽が夜間に闇の世界で戦い翌日再び東から昇るのに必要な活

北米インディアンの生活 (6)

力を提供せねばならないというのがアステカ族の信仰の中心であり、アステカ族の使命であると考えていたからである。コルテス (H. Cortes) に率いられたスペイン軍は、1519年ベラクルス付近に上陸し、スペイン人と同盟したトラスカラ族などの助けを借り、1521年8月に首都を陥れ、最後の首長クアウトモク (Cuauhtemoc) は捕らえられて“アステカ王国”は滅んだ。アステカの建造物、石彫、羽毛細工、絵文書などの芸術品は大部分破壊されるか略奪されたが、いくつかの重要な作品が現存している。中でも“太陽の石”もしくは“アステカの暦石”はアステカの宇宙観を表すものとして著名である (小池佑二「アステカ」『文化人類学事典』石川栄吉他編、弘文堂、昭和62年、PP. 10-11)

- 13) 七つの洞窟 the Seven Caves。 「言い伝えによれば、メキシコ中央高原に住むナワ系の7部族は共通の起源を有していた。彼らは、陸地を取り囲む海の彼方の国、チコモストク、『7つの洞窟の地』からやってきた。これらの『七つの洞窟』は、ナワの7部族、すなわち、アコルワ族、チャルコ族、チナンパネカ族、コルワ族、テパネカ族、トラウイカ族、トラテポツカ族に対応している」(セルジュ・グリュジンスキ著・落合一泰監修『アステカ王国 文明の死と再生』知の再発見双書19. 創元社、1996年P. 23)。なおナワ系、ナワ族とは、ナワトル語という一方を話す人々で、チチメカ族などトルテカ系の民族をいう。前注12)を参照。
- 14) ショチカルコ Xochicalco。 メキシコ中央高原に位置する都市の一つ。プエブラに近い。
- 15) ポポカテトル Popocatepetl。 「メキシコ中部の火山。5,452m。Popoの愛称で呼ばれる。ナワトル語 Popocatepetl (popoca よく煙を吹き上げる + tepetl 山)」(桑名一博他編『西和中辞典』小学館、1997、P. 1521)。
- 16) テノチティラン Tenochtitlan。 「サボテンの花咲く地」の意。アステカ王国の首都。本注12)参照。
- 17) ケツァール鳥 the quetzal。 「ケツァール、キヌバナドリ (絹羽鳥)。メキシコの Yucatan 半島および中央アメリカ原産の鳥。雄は絹のように光る緑の長い2対の上尾筒があり、Azteca 族では神聖な鳥としてあがめられ、Maya 族の芸術や神話にも登場し、主に首長だけがその羽毛を身につけた。グアテマラの国鳥」(同上、P. 1584)
- 18) チャルコ Chalco。 メキシコ中央高原の東よりに位置し、かつてはアステカ帝国の支配下にあった。メキシコ市の南西に現在遺跡がある。
- 19) コルワカン (クワカン) Colhuacan (Culhuacan)。 チャルコよりやや西に位置するが、メキシコ中央高原の盆地に遺跡がある。
- 20) アスカポツツアルコ Atzacapotzalco。 かつては中央高原に蟠踞し、アステカ族 (メシカ族) を支配したが、15世紀初め、アステカ族に滅ぼされた。本注12)参照のこと。メキシコ市の北西に遺跡が残る。
- 21) テスココ Tezcoco, Texcoco。 現在メキシコ市の北方に同名の市がある。アステカ王国の首都テノチティランは、テスココ湖に浮かぶ小島に建設された。注12)および15)参照。
- 22) タクバ Tacuba。 文面からしてアステカ以前にテスココ湖の沿岸に居住した部族のようであるが、詳細は不明。
- 23) アカマピチュトリ、アカマピチュトク Acamapichtli。 「アカマピチュトリはトゥーラの司祭神ケツァールコワトルの末裔とみなされており、湖岸の漁撈民にすぎないメシカ族には、トルテカ時代の威信を体现しているように思われた。彼は1372年から1391年までの約20年間指導者の地位に留まり、当時著しく勢力を拡張していたテパネカ系の隣国アスカポツツアルコの圧力に抗することに力を尽くした。

他方、メシカ族のもう一つの町トラテロルコは、テパネカ系の君主を戴いた。こうして彼らはメキシコ盆地の強国を結びつける同盟の網の目に次第に取り込まれていった。それだけではなく、今や、テノ

- チティトランには王の家系が創設された。アカマピチュトリの数多くの息子たちが新たな支配階級を構成し、メシカ社会で次第に権力を独占するようになっていったのである」前掲セルジュ・グリュジンスキ著・落合一泰監修『アステカ王国 文明の死と再生』P. 26-28)。なお、本注12)も参照されたい。
- 24) ウイツィロポチトリ Huitzilopochtli。 アステカ族の戦争と太陽の神。現在メキシコ市博物館には、ウイツィロポチトリが、爪に蛇を掴んだワシが舞い降りたサボテンの上に都を建設すべし、と教えたというアステカ族の神話を伝える『メンドーサ・コデックス』が保存されている(吉村作治編集主幹『Newtonアーキオ Vol. 8 略奪された文明-謎のマヤ・アステカ・インカの栄光と悲劇』ニュートン・プレス, 1999, P. 101)。注12) 参照。
- 25) コリマ Colima。 メキシコ西部太平洋岸のハリスコ州の一都市。
- 26) タシュパン Taxpan。 メキシコ西部大平洋岸ハリスコ州にある都市。コリマより北にある。
- 27) チョルーラ Cholula。 メキシコ中央高原の東にある都市。紀元400年頃、テオティワカンの植民した街であったらしい。後にトルテカ時代を経てアステカ王国の支配下に入った。
- 28) タラスカ Taraska。 アステカの侵攻に屈しなかったといわれる数少ない部族の一つ。メキシコ西部太平洋岸ミチョアカン州のツインツツアン湖畔に大センターを築き、今も其の遺跡が残っている。
- 29) トラスカラ Tlaxcala, Tlaxcalan。 メキシコのほぼ中央部に位置する都市。「ナワトル語を話すナワ族に属し、伝承によると13世紀頃にアステカ族などとともにメキシコ北西部から移住して、現在のトラスカラ州(州都トラスカラはメキシコ市の東方約90km)に居を定めた。征服前にはこの地方は“トラシュカラン”と呼ばれ、初めはピノメ族などが住んでおり、やがてオトミ族が東部地域を中心に住み着いたのだが、後に新来のトラスカラ族に圧迫され、文化的に劣っていたオトミ族は従属的な地位に甘んずることになった。トラシュカランはメソアメリカの伝統的な四分法に従い、政治的には4つの町(テペティクバク, オコルテルルコ, ティサトラン, キアウイシュトラン)により支配されていた。アステカ王国が強大になると、その首長はテスココやトラスカラを過酷に扱ったので、トラスカラ族との関係は悪化した。アステカ族はたびたび遠征を試みトラスカラを攻めたが、遂に併合することができなかった。このような敵対関係があったためか、トラスカラ族は、コルテスに率いられたスペイン人と同盟を結び、兵士と労働力を提供し、アステカ王国の崩壊に手を貸した。征服後しばらくトラスカラ族は優遇されたものの、スペイン人に協力することが、その後言語・宗教だけでなくあらゆる面で、スペイン文化への同化を意味しようとは想像だにできなかったに違いない」(小池佑二「トラスカラ」『文化人類学事典』, P. 535)。
- 30) ショチケツァリ Xochiquetzalli, Xochiquetzal。 メキシコの愛の神。「ケツァルコアトルが精子を播いて生まれた蝙蝠が、愛の神であるショチケツァリのもとへ飛んでいき、その生殖器の中にある“僅かな肉片”を噛みとって神々のもとへ届けたところ、花に変えられた。これがメキシコにおける花の起源である」(John Bierhorst, *The Mythology of Mexico and Central America*, William Morrow and Company, Inc., New York, 1990, P. 147)
- 31) トラロク Tlaloc。 「メキシコおよび中央アメリカの農耕民にとって雨の神トラロク(マヤではチャック Chac)は重要な役を担っていた。アステカの他の多くの神格と同様にこの神もまた残酷で親切という両面性を有していた。アステカ人は溺死、ハンセン氏病など病気の原因をこの神に帰していた。とはいえ、トラロクはこれらの人々を死後、普通のアステカ人では望めない幸福な状態にしたという。古代メキシコの都市テオティワカンの壁画には、死者の魂を迎えるトラロクのいる楽園を描いたものが残っている」(John M. Bickerman ed. op., cit., *Myths and Legends of the World*, Vol. I, P. 20)。

北米インディアンの生活 (6)

32) トシュカトル Toxcatl。 アステカの歓喜と悲嘆の神。後出 (本文 P. 104以下) するように、テスカトリボカを祝って行われた古代メキシコ最大の祭り。

33) 原文 (英訳) は以下の通り。

Words like the saddest, drooping flowers I seek
I, the Singer, weaving my tears in song,
For Youths, alas ! - - broken as spears are broken !
And the women weep in darkened corners
But the men lift up their heads in pride.

34) トラテロルコ Tlaltelolco。 首都テノチティトランに次ぐアステカ王国第二の都市で商業の中心地であった。同じテスココ湖にあり、南側のテノチティトランとは橋で結ばれていたことが、国立宮殿のフレスコ画より分かる (前掲, 『Newton アーキオ - - 略奪された文明』 P. 129)。注12) も参照。

35) ウイ・トゾストリ Huey Tozoztri。 アステカ族の慈悲の神。

36) シヴァ Siva 湿婆。 ブラフマー、ビシュヌと並ぶ、ヒンドゥー教の三大神格の一つで破壊と創造を象徴し、また人間の運命を支配する。

37) イカロス Icarus。 ギリシャ神話で、父ダイダロス Daedalus の作った蠟付けの翼で、ミノス王 king Minos の支配するクレタ島から空を飛んで逃げたが、太陽に近づきすぎたため蠟が溶け海中に落ちて死んだという若者。

38) ハーバート・スピнден Herbert Spinden。 アメリカの人類学者で本編の作者であるが、生没年不詳。マヤ研究、ことにマヤの暦法の研究に基づくマヤ文明の時代区分、「スピнден対照法」によって知られる。以下の論文二編と二冊の著書がある。

Spinden H. J., Ancient civilizations of Mexico and Central America. (American Museum of Natural History, Handbook series. No.3. 1917.)

The Origin and distribution of agriculture in America (Proceedings of the 19th International Congress of Americanists, New York, 1917.)

Maya Art and Civilization, 1957, Falcon's Wing Press.

The Maya and Their Neighbor, 1940, 1962, University of Utah Press.

付記：本稿はエルシー・クルーズ・パーソンズ編著 / 神徳昭甫訳「北米インディアンの生活 (5) - - 23部族の伝承と習慣」『富山大学人文学部紀要』第36号 (2002年3月) の続編である。なお、文献は最終稿にまとめて発表する予定。

